ＢＢ女優としてのドリュー・バリモア論

ドッペルゲンガー

DOPPELGANGER

１９９３年アメリカ映画

監督＝アヴィ・ネッシャー

出演＝ドリュー・バリモア／

ショージ・ニューバーン／

デニス・クリストファー

ジョディ・フォスターは、子役で成功し、その後ずっと第一線級のポジションを維持しつづけたという意味で、ハリウッドでも希有な存在でした。

幼い日に成功を手にし名声と富に囲まれることが、その後の人生にどんな悪影響を及ぼすか、しかも富と名声が日本の芸能界とは比較にならぬくらい桁違いのハリウッドと来た日には、ぞっとするものがあります。

たとえばリンダ・ブレア。『エクソシスト』（１９７３年）で悪魔にとりつかれた少女を演じ、十三にしてアカデミー賞にノミネートされた彼女は、十五歳で子供を産み、十七歳でコカイン常用者として逮捕され、その後は童顔に似合わぬ巨乳とかつての名声をのみ武器として『チェーンヒート』（１９８３年）などの女囚映画でしかお呼びがかからず、四十路を越えた今ではどこでどうしているのやら。

マコーレー・カルキンはもっと悲惨です。十歳で主演した『ホームアローン』（１９９０年）が世界的に大ヒット。一躍、トップスターの仲間入りを果たしたまではよかったのですが、莫大な出演料をめぐって父親と母親が大喧嘩、安息の場であるべき家庭はカネをめぐって罵り合う修羅場と化し、マコーレー君が十五歳のときに離婚。傷ついた心を慰める方法はドラッグしかありません。

離婚後も息子からタカりつづけようとするバカ親どもに愛想をつかしたマコーレー君、両親との義絶を宣言し、十八歳で結婚。しかし二年後に離婚。その理由というのが、家庭的な環境を望んだ妻と、芸能界へのカムバックを望んだマコーレー君の「意見のすれ違い」からだとか。どんなに悲惨な目にあっても「役者と乞食は三日やったらやめられない」のかもしれません。

ここでとりあげるドリュー・バリモアもまた、子役で成功→麻薬常習→Ｂ級映画の常連、という典型的なパターンを辿った一人です。このままリンダ・ブレア路線（女囚映画、Ｂ級レディアクションもの常連）を突っ走ってもおかしくはなかったのですが、あにはからんや、いまやハリウッドでもメジャーな存在として認知されるまでに蘇ったのですから、世の中というものは分かりません。

一九七五年生まれのドリュー・バリモアを一躍有名にしたのは、いうまでもなく七歳で出演したスティーヴン・スピルバーグの『Ｅ．Ｔ．』（１９８２年）でした。

ちなみに、彼女はハリウッドで生まれました。曾祖母は無声映画時代のスタアであったモーリス・コステロ、祖父には有名なハムレット俳優のジョン・バリモア、ハリウッドの名花ドロレス・コステロ、父親もやはり俳優と、まさに役者の名門の血筋なんです。

生まれたときからショウビスの華やかな世界に囲まれ、すなわち、「わるいこと」を覚えるにはこれ以上はないという環境で幼年時代を過ごした彼女、九歳で酒の味を覚え、十歳でタバコと

マリファナを覚え、十二歳でコカイン中毒、十三歳でなんとか中毒から脱したものの、突然結婚したかと思うと六週間で離婚したり、『プレイボーイ誌』で全裸を公開したり、全身に六つの刺青があったり、十代にして乱行のすべてをやり尽くしたという感があります。

当然、メジャーからはお呼びがかかるはずがありません。やらせまくりのスクール・ガールか少女娼婦、そんな役ばかりをあてがわれ、えげつのない媚態を振りまき、豊かな胸をさらけ出し、男性観客の軽蔑と欲情のないまぜになった視線を浴びておりました。

その彼女が一躍メジャーな存在となったのは、『バッドガールズ』（１９９４年）からではないでしょうか。

ジョナサン・カプラン監督、共演はマデリーン・ストウ、メアリー・スチュアート・マスターソン、アンディ・マクダウェルと錚々たる女優陣。男性の横暴に耐えかねた四人の女性たちがカウボーイの装束に身を包み、自由を求めて大暴れ、という『テルマ・アンド・ルイーズ』の西部劇バージョン。さすがに二番煎じでさほど面白い内容ではありませんでしたけど、メジャーはメジャーです。

ここでドリューは、悲惨な境遇の少女娼婦という「やっぱり」みたいな役柄を演じておりましたが、ちょっと驚いたのは、彼女のキャラクターです。

それまでの彼女は、眉のあたりに力をこめて、蛇のような怖い目つき、唇に邪悪な微笑みを浮

かべて男を誘惑するという、絵に描いたようなビッチ（雌犬／娼婦／色情狂）ばかりを演じていました。ところがこの映画で彼女が演じた娼婦は、貧しい境遇から仕方なく身を売り、お客から虐待されやしないかと常にびくびくしているような、観客の同情をひくキャラクターでした。

当然、色仕掛けで男を手玉にとるしたたかな悪女役を想像していた私には、これはちょっと意外でした。そして、もっと意外なのは、これまでのイメージとは正反対の役を、みごとにこなしていたことです。

というよりも、「これがほんとうにドリュー・バリモアなのか？」と疑うくらい、それまでの彼女のイメージとは一線を画していた。いわば、新しい境地を開いたとでもいうのでしょうか。

じつを言いますと、簡単なことなんです。ドリュー・バリモアがイメージ・チェンジに成功した理由はひとつ、視覚的にイメージをチェンジしたからです。すなわち、メークをがらりと変えたんです。

それまでのドリューは、ブルネットで、眉を太く描き、ふてぶてしさを全面に押し出したメークをしていました。ところが『バッドガールズ』では、髪の毛を鮮やかなプラチナブロンドに染め、眉を細く三日月型に剃り、臆病な少女のような、いじらしい雰囲気をつくりあげていたのです。

女は化ける、と言いますけど、ほんとうに髪形やメークのちょっとした工夫で、雰囲気はがら

りと変わります。そして、がらりと変わった雰囲気で、本人の立ち居振る舞いまでが変わってしまうのは、よくあることなんです。

ここで本題であるべき『ドッペルゲンガー』の紹介をすませておかねばなりません。

白状しますけど、ストーリーなんか忘れてしまいました。ドッペルゲンガーとは、ご承知のとおり、自分と同じ姿かたちの人間がもう一人いるという怪奇現象ですけど、この映画では、悪魔にとりつかれて二重人格となった少女が主人公です（だったと思います）。

彼女はニューヨークで人を殺し、ロスに引っ越します（と、映画のデータベースに書いてありました）。そして、ルームメイトを募集となった、売れない作家である繊細な青年が応募する。彼は、彼女を悪魔から救うべく奮闘する（で、ほぼ間違いないはずですが自信がありません）。

この映画の公開は『バッドガールズ』の一年前で、当然、ドリューは黒髪、太い眉、露出の多いセクシーなコスチュームというスタイルのままです。ダンスパーティのさなか、黒いドレスで、突然悪魔にとりつかれ、衆人環視のなか自慰を始めたりと（いや、オルガズムのまっただなかよろしく身をくねらせるだけだったかな?）、幼さの残る容貌とやることのギャップに、男性どもよ興奮せよ、との作り手の狙いがみえみえでした。

で、金蹴りです。

肩を出したミニスカのワンピースという刺激的なコスチュームをまとったドリューは、道路工事の人夫たちに「いよう、ねえちゃん、たまんねえぜ」と冷やかさます。

かっとなったドリューは、色黒のアジア系の人夫にツカツカと詰め寄り、「あんたの妹がそんなふうに言われたら、どう思う?」とつっかかる。人夫は「おれの妹はそんなかっこうはしねえぜ」。ドリュー、「わかったわ」と背中を向けて立ち去ろうとする。と、くるりと踵を返し、人夫の肩を両手で抑えて、膝金！

うめき声をあげてしゃがみこんだ人夫の「このビッチ！　殺してやる！」との罵倒に、車に乗り込みながら「やってみなさいよ！」と嘲笑を浴びせ、中指を突き立てるドリュー。

不良少女たるもの、たんにふしだらなだけではいけません。やはり、暴力的でなければならない。しかも、外国からの移民労働者なんぞにからかわれて黙っていてはならないんです。金玉のひとつも蹴りあげるくらいじゃなきゃ。

いま思えば、『ドッペルゲンガー』を最後にメジャーの仲間入り（復帰?）をはたしたドリュー・バリモアにとっては、ある意味で記念すべき作品なんでしょうね。われわれＢＢファンにとっては、これからますますビッチぶりを発揮してＢ級映画で盛大に玉を蹴ってくれと期待していただけに残念なような気もします。

『バッドガールズ』の後のドリューの活躍はここで述べるまでもありますまい。『ボーイズ・オ

ン・ザ・サイド』（１９９５年）ではウーピー・ゴールドバーグやメアリー・ルイズ・パーカーに囲まれながら、いじらしくもけなげな少女役を演じ、「シンデレラ」を現代的に味付けした『エバー・アフター』（１９９８年）では「自立した女性」としてのシンデレラ役を、アンジェリカ・ヒューストンの継母役を向こうに回して熱演。『チャーリーズ・エンジェル』（２０００年）はそうとうオバカな映画でしたけど、共演はキャメロン・ディアズ、ジョン・フォーサイス、ビル・マレーと錚々たる面々。なんでも、かつてジェーン・フォンダが主役を演じた『バーバレラ』のリメイク（２００１年）にも主演しているそうです。

一九九六年にヒットした『スクリーム』（ウェス・クレイブン監督）に特別出演、殺人鬼に襲撃される女子大生役を演じ、『ドッペンゲルガー』以来の金蹴りを見せてくれましたけど、映画じたいはＡ級テイスト、当然、その金蹴りも「必然性」に溢れた、メジャー女優にやらせてもおかしくないような、色っぽさに欠けたものでした。

一九七五年生まれのドリュー・バリモアは、ジョディ・フォスターやダイアン・レイン、ブルック・シールズより一世代下の女優です。

ジョディが『タクシー・ドライバー』で少女娼婦を演じた七〇年代後半は、まだまだメジャー映画とＢ級映画の格差は大きなものがありました。しかしながら、そういう映画の格付けは、近年ではずいぶんぼやけているように思います。すなわち、Ｂ級からメジャーへの敷居がずいぶん

と低くなったのかもしれません。

たとえば、ドリューと同世代（一歳下）のアリシア・シルバーストーン。『ベビー・シッター』（１９９５年）や『トゥルー・クライム』（同）で、男を誘惑する早熟なティーンを演じていた彼女は、しかしながら『バットマンとロビン』（１９９７年）を境にメジャー路線をまっしぐら、ついにはケネス・ブラナーの『恋の骨折り損』（２０００年）でフランス女王を演じ、また、本人も知的なイメージを前面に出して第二のジョディ・フォスターを目指しているような気配があります。

ドリュー・バリモアについて感心するのは、彼女はダイアン・レインやブルック・シルーズ、そしてアリシア・シルバーストーンのように、ジョディ・フォスター路線の真似をしようとしないことです。つまり、彼女の演じるキャラクターは、依然として娼婦なんです。

西洋には「娼婦＝聖なる存在」という十九世紀フランス自然主義文学以来の伝統的なキャラクターが存在します。マリリン・モンローがその典型ですが、「みずから意図をもって男を誘惑する悪女」ではない、「純粋な魂をもちながら、男を引き寄せてしまい、結果的に罪を犯してしまう」女性です。

すなわち、ドリュー・バリモアは「体をはって男を誘惑する娼婦」から、「純粋でいじらしく男を引きつける娼婦」に変わっただけなんですね。

「体をはって男を誘惑する娼婦」は、ほんとうに娼婦ならばいいけれど、素人の女性がそれをや

ったらたまったもんじゃありません。男性にとっては正直いって迷惑な存在です。男性は、みずから仕掛けて女性を狩るのは好きですが、女性から狩られるのは自尊心が許さないんです。

つまり、ドリュー・バリモアは「狩る存在」から「狩られる存在」になった。そのことで、多くの男性から（そして女性からも）受け入れられた。そしてメジャーになった。

そして「狩る存在」から「狩られる存在」へとみごとに変貌を遂げた理由はなにか。

つまんない理由です。

眉を細くしたからなんです。